

暮らしやすい都市の未来へ向けて

水と緑、安心、賑わいのある環境へ

少子高齢化の時代に新しい付加価値を持った賃貸住宅ストック再生、水や緑との環境共生、そして地方都市再生など、UR都市機構はさまざまな取り組みをしています。7月に理事長に就任した小川忠男が、日本建築にも詳しい青森大学教授、エッセイストの見城美枝子さんをお迎えして、対談を行いました。



対談

小川 忠男 おがわ ただお

独立行政法人都市再生機構理事長。昭和42年3月東京大学法学部卒業。昭和42年建設省入省。以後、同省住宅局長などを経て、平成11年同省大臣官房長、平成13年国土交通審議官、同年(兼)内閣官房内閣審議官(兼)都市再生本部事務局長。平成16年7月独立行政法人都市再生機構副理事長、平成20年7月から現職。

見城 美枝子 けんじょう みえこ

青森大学教授、エッセイスト、ジャーナリスト。TBSのアナウンサーを経て、フリーに。早稲田大学大学院理工学部研究科を修了し、平成11年4月から同博士課程に在籍し、日本建築の研究を進める。現在、青森大学社会学部で、建築社会学、メディア文化論、環境保護論を講義。日本リーダー養成協会理事長、財団法人尾瀬保護財団理事、国土技術政策総合研究所研究評価委員会(国交省)、公共建築審査委員会委員などを務める。

77万戸の賃貸住宅ストックをどう再生するか

見城——UR都市機構の前身である日本住宅公団が団地を大量に建設していたのは、私たち団塊の世代が高校や大学に通っていた頃だったですね。都会型の共同住宅の提案という意味では、公団の建物は常に時代の数歩先を行くリーダーシップ的な役割を担ってきたと感じています。まさに日本の住文化を作ってきたといっても過言ではないのでは。また、郊外型の団地でもその力を発揮していました。

小川——そうですね。日本住宅公団が発足して、約半世紀の歴史があります。特に前半は、とてつもない仕事をやってきた組織だと思っています。

見城——排水パイプを改良して、床下を低くすることによって高い天井高を確保し、広々とした空間を作ったのも住宅公団のお陰です。実は、これは私が早稲田大学の大学院で「上がり框」を中心とした建築の修士論文を書いた時にわかったことなんです。天井を高くする最近の傾向は、団地だけではなく戸建て住宅にも広がっていますから、公団時代から「上がり框」の新しいあり方を提案し、日本の住文化を担ってきたと思います。

小川——ひと口に半世紀といいますが、その間に世の中はずいぶん変わってきました。歴史的に我々が造ってきたものは、中堅勤労者を中心としたファミ

C O N T E N T S

02 [特集対談]
暮らしやすい都市の未来へ向けて
 水と緑、安心、賑わいのある環境へ
 見城美枝子 青森大学教授、エッセイスト、ジャーナリスト
 小川 忠男 独立行政法人都市再生機構理事長

07 **UR Project Digest**

- ▶ 都市再生 ◀ **活気あるまちづくりを総合的にプロデュース**
- ▶ 住環境 ◀ **安全で安心できる住まいづくり**
- ▶ 災害復興 ◀ **新潟県中越沖地震の復興支援への取り組み**
- ▶ 郊外環境 ◀ **環境共生都市の実現を目指す活動**

11 都市の景観に四季を愛でる 2—秋—
広がる秋桜の里……千葉ニュータウン

13 倉本聰の 地球に暮らす 自然と住まう 2
木を植えるということ

15 ル・コルビュジエの描いた『輝く都市』 Section 2
光に戯れる白い建築 染谷正弘 (建築家)

17 Report 第4回都市再生フォーラム
ECO²の時代へ
地球温暖化対策とまち・住まいづくり

21 **UR TOPICS**
 編集後記